

民主
PRESS MINSHU
＜号外＞
プレス民主編集部
東京都千代田区永田町
1-11-1
03-3595-9988

参議院議員
く す お
大島九州男



福岡事務所
福岡県直方市知古764-1
国会事務所
東京都千代田区永田町
2-1-1
参議院議員会館910号室
電話03-6550-0910
kusuo_ooshima02@sangiin.go.jp

ホームページも
ご覧下さい
<http://kusuo-o.net/>
大島九州男
キャラクター
Qちゃん

Top 紀伊半島豪雨からの復旧に全力を!

台風12号による集中豪雨で被害を受けられた皆さまにお見舞いを申し上げます。
内閣府によると、和歌山県、奈良県、徳島県、三重県、埼玉県、広島県、愛媛県、香川県、兵庫県、鹿児島県において死亡・行方不明の方々が確認されており、平成になってから最悪の台風被害であると報道されています。
大島九州男議員は、参議院災害対策特別委員会に出席し、平野防災担当大臣から状況報告を受け、紀伊半島を始めとした被災地へ迅速な支援が必要である旨を伝えました。
災害対策特別委員会では、冒頭、紀伊半島豪雨で犠牲となられた方々への黙とうを行い、次いで平野防災担当大臣から被害状況を聴取、そして質疑が展開されました。
例えば、世界遺産である和歌山県那智勝浦町の「熊野那智大社」については裏山から土砂が流入する被害があり早急な対応が必要であることが確認され、同じく世界遺産「熊野古道」でも複数地点で土砂崩れや倒木が発生し通行不能であることも確認されました。
また和歌山県を中心に家きん類にも被害が出ています。牛600頭、豚700頭が流出し、この地域の特産である養蜂業（ハチ）にも相当な被害あり、さらには家きん類の流出による衛生面への特段の配慮が必要であること等についても懸念が示されました。
ライフライン、雇用・産業面など各方面への迅速な支援が必要であることが与野党間で確認され、政府として責任を持って対応にあたる事が議論されました。



災害対策特別委員会の冒頭、紀伊半島豪雨で犠牲になられた方々に黙とうが捧げられた

報告



決算委員会と厚生労働委員会
決算委員会の理事と、厚生労働委員会の委員を拝命致しました。
首尾一貫して主張している療養費の課題を始めとする厚生労働行政に真正面から取り組み、さらには国の財布の出口である決算委員会において、全力で働かせていただく所存です。

報告



国連派遣でラオスに向かう
国連人口基金（UNFPA）が主催するプログラムで、ラオスに向かいました。
ラオスは妊産婦・乳幼児死亡率が未だに高い国です。国連が推進する母子保健向上政策が滞りなく実践されているか、ODA委員の目線で確認させていただきました。

野田新内閣 主な役職のご紹介

厚生労働省

大臣
小宮山洋子
(衆・東京)

副大臣
辻 泰弘
(参・兵庫)

副大臣
牧 義夫
(衆・愛知)

政務官
津田弥太郎
(参・全国)

文部科学省

大臣
中川正春
(衆・三重)

副大臣
奥村展三
(衆・滋賀)

副大臣
森ゆうこ
(参・新潟)

政務官
神本美恵子
(参・全国)

政務官
城井 崇
(衆・福岡)

財務省

大臣
安住 淳
(衆・宮城)

副大臣
五十嵐文彦
(衆・埼玉)

副大臣
藤田幸久
(参・茨城)

政務官
三谷光男
(衆・広島)

政務官
吉田 泉
(衆・福島)

報告 被災地からインターンを受け入れました

東日本大震災による影響で就職活動環境が悪化していると伝えられています。
この度、大島事務所では仙台市内の私立大学から4年生をインターンとして受け入れ、国会事務所での業務を通じて社会勉強をしていただきました。
この経験を元に就職活動を実らせ、立派な社会人になって欲しいと願っています。



政策

義足ランナーの是非

南アフリカ人のオスカー・ピストリウスさんが世界陸上に出場して、準決勝まで勝ち上がりました。

皆さんは彼を見ましたでしょうか。

彼はいわゆる義足のランナーであり、この数日間、ニュースに登場しないことがないほど注目されました。今回の世界陸上で彼は、残念ながら決勝までは勝ち上がりませんでした。その堂々たる走りに多くの方が感動したことと思います。

実は2007年大会の時に彼は、決勝レースの後半で、驚異の6人抜きで2位になり、一躍時の人となりました。

しかしながらその翌年義足が人間の「足」よりも機能的に優れている等の理由から、国際大会に出られなくなったのです。

その後、オスカー・ピストリウスさんは「スポーツ仲裁裁判所」に対して、アメリカで実証された機能テストの報告をすることになります。

その機能テストでは「義足の使用によって、人間の足よりも肉体に有利になるとはいえない」としたことから、彼の実力が認められ、彼は再度国際大会に出場できることになったのです。

義足ランナーの是非については色々な意見があることと思います。皆さんと一緒に、こうした課題に取り組んでいきたい、そのように思います。

写真・Coda.coza氏提供



政策

東南アジアのバッテリー

9月2日、ビエンチャン郊外のダム「ナムグム第1水力発電所」を訪問しました。

このナムグム第1水力発電所はラオス最大級の発電施設で、2009年の補修工事が日本のODA支援で行われ、日本のメーカーが最新の技術で更新した施設です。

現在、ラオス政府は「東南アジアのバッテリー」を目指して、再生可能エネルギーである水力発電の開発に注力しています。同国の主な輸出品目の内、第3位が電力（外務省調べ）であり、隣国の中国、タイへ電力が売電されています。

内陸・山岳国であるラオスにとって、新たな「輸出品」として同国政府が本腰を入れているとのことで、写真にあるダムでは、100万キロワット級の発電が可能で、メコン川の「圧倒的な大地の力」を見せつける驚きの訪問となりました。

しかしながら、「東南アジアのバッテリー」を目指す同国政府にとって頭の痛い問題もあります。かつて日本もそうであったように、河川の開発が進むにつれ、河川での漁業を生業としていた方に影響が出始めているのです。

つまり、豊かな水産資源を誇ったメコン川が、ダムなどの開発によって水流を妨げられ、生態系に影響がでているのです。事実、海外メディア等でも、メコン川の開発によって貴重なナマズ類の資源が絶滅危惧視されているなどの報道もあります。

このように、経済開発と自然保護をいかにして両立していくか、大きな課題を抱えての「東南アジアのバッテリー」計画であることがわかりました。

そうは言っても、ラオスは大河「メコン川」の35%を占める国です。膨大な「水力発電資源」をいかにして国の発展に結びつけ、同時に自然環境を保護していくのか、こうした観点からの議論が必要だ、そのように思いました。



写真説明

ラオス仏教最高峰の寺院タートルアン(That Luang)。

伝承では3世紀頃、インドからの使いの一行がブッダの胸骨を納めるためにタートルアンを建立したと伝えられる。

1828年の紛争により損傷を受けたが1936年に改修されて現在に至る。

